

今ここで、神奈木の非常識ぶりをあーだのこーだの愚痴ってもしようがない。平常心というより、寛容かんようさと忍耐力を試されているような気がするのには決して錯覚などではないだろう。

下校時の廊下で高槻としゃべっていたところは不特定多数の目撃者がいるので、誤魔化しようがない。そのあと、二人して場所替えしたこともだ。

しかし。それがなぜ、いきなり『告白』になるのか。

噂は人の口をわたっていくたびに尾ヒレや背ビレが付いていくものだが、ここまで来ると、誰かが故意にスキャンダラスな方向へと煽あおっているのではないかと思いたくもなる。

なんの根拠もないことでも、これだけハッキリと皆の前でブチまけられたら、下手に有耶無耶うやむにするのもマズイ。

「おまえさあ、いったいどこで、そんなくだらないネタを拾ってくるんだ？」

「くだらなくないよ」

それは、そうだろう。くだらないことを、わざわざ確かめに来るはずがない。

だが、それはあくまで神奈木にとっては——である。TPOさえ考えてくれたら、こんな大騒ぎにはならない。

(つーか、もしかして、それを狙ってんのか?)

つい、そんなことまで考えてしまっう。

いったい。

誰が。

そういうくだらないことを神奈木に吹き込んだのか。

今更ながらに、チクリ魔に対する怒りがフツフツと湧いてくる一真だった。

「おれはただ、事実を知りたいだけ」

「事実？」

火が立ちそうにもないところにわざわざ放火して？

一真と高槻が立ち話をしていただけで告られたの何だのと腐れバカな妄想に走る奴らは、二人に含むものがあるというより、ただ単に、それを神奈木が知ったらどういうリアクションにでるのか、それを遠巻きにして好き勝手に弄って遊びたいだけなのではないか？

一真には、そう思えてならなかった。

(だからって、なんで——高槻？)

変な話、神奈木を弄り倒したいのなら高槻をダシにするより津寺の方がよほど効果があるのでは？

なんといつても、ペットな神奈木が『妬ける』呼ばわりするのは番犬の津寺だけである。もしかして、あらぬ噂のスピーカー元だとわかると、津寺に倍返しされそうで怖い——とか？

つい、それを思つて。

(ありえねー……)

内心のため息を漏らす。深読みの裏読みも、程度ものだろう。

「告られてねーよ」

それだけは、きっぱりと断言しておく。

「ウソ」

「何が？ つーか、なんでわざわざ、あいつが俺に告らなきゃならないわけ？」

それって、おかしいだろ？

高槻だぞ？

——とか思う一真は、ごくフツの感性の持ち主だった。

高槻とは中学からの親友——ということを抜きにしても、日々部活に燃えている熱血漢は今のところ色気よりも食い気とバレーだ。

常日頃から『神奈木辰巳完全調教』にメラメラと燃えている高槻であるからして、告った相手は神奈木——とか言われた方がまだしもすんなり納得できる一真だった。他の連中にしてみれば、それこそ『ありえねー』展開かもしれないが。

すると。神奈木は、いきなりしゃがみ込んだ。

「だから、おれが知りたいのはその中身」

上から視線がタメになっただけで、その距離感が濃密になる。

「はあ？」

今度こそ、一真は思いっきり目を眇めた。

中身——？

(中身って……なんだ?)

告る中身の必然性といえは『好き』の意思表示に決まっている。

要するに、高槻に告られてどういふ返事をしたかということなのか？

「放課後、わざわざ人気ひとけのない武道場の渡り廊下で千堂に告るっていうか……そんなの変でしょ？ 千堂と高槻の仲なんだし、フツーに告ればいいじゃない。朝は同じ電車なんだから、そのときとかさあ。おれは千堂のメルアドも携帯ナンバーもまだ教えてもらってないけど、中学からの親友ならそんなのとつくでしょ？ だいたい、ヒソヒソ内緒話なんてそんなの高槻らしくないし。絶対に訳あり？」

ちよつと……待て。

「高槻ねえ、絶対、おれに何か隠してるんだよ」

何か——変？

「おい、神奈木」

「ちゃんと見てた奴がいるのに、千堂に告ったことを否定するんだよ？ おれは親友の千堂に告つたりしねーッ……とか顔面引きつらせて全面否定。おかしいじゃない」

いや。おかしいのは、たぶん、『告る』という神奈木の定義。

——ではなからうか。

全面否定する高槻の顔つきまでリアルに想像できる一真だった。

「千堂だって、高槻と示し合わせたように思いつきり否定してるし。ますますアヤシイ」  
示し合わせるも、何も。一真や高槻だけではなく、そういう場合は誰だって思いつきり全面否定に決まっている。

「ねえ、高槻は何を告つてたの？ まさか……おれの絶不調ぶりとかじゃないよね？」

ざわ。

ざわ……。

ざわ……………。

教室がざわめく。何か、大きな誤解がポロポロと剥がれ落ちていくように。

「高槻と、なんの内緒話してたの？」

期待を込めて、神奈木が一真の目を覗き込む。

「——神奈木」

「はい？」

その頭を、一真は平手で一発叩いた。

「イッたあああッ」

大袈裟に頭を抱えて、神奈木が呻く。

けれども、誰も一真を声高に非難したりしなかった。もしかして、自業自得？

日頃、何かと神奈木に対しては甘いミーハーな女子軍団も含めて、神奈木を見る目つきは、皆同じだった。

「まぎらわしい言い方、すんなッ」

「えーッ、何が？」

しばし、小首を傾げて。

「まぎらわしいって、何？」

ブツブツと呟き。そして、

「あー、なんだ。千堂ってば、もしかして誤解したの？」  
などと言い出す。

何を？

——問い返すのも疲れるので、無言で睨む。

「あれ？　じゃ、高槻もかな？」

今更……である。

「やだな、千堂。高槻と千堂の友情がラブラブになるはずないじゃない」  
きっぱりと断言して立ち上がりざま、神奈木は、



「だって、高槻はおれが千堂にぞっこんラブなのを知ってるんだよ？俺たちの間に割って入ろうなんて、そんなの絶対ムリ。だいたい、キャラ違うし？」

なにげに暴言をカマしながら、笑い飛ばす。

ぞっこんラブ……。

(それって、絶対に違うから)

一真は、思いつきり噛み潰す。

言葉ひとつで話がこままでズレまくってしまうと、神奈木の感性がいかに通常の範疇から逸脱しているのかがよくわかる。神奈木のセリフを鵜呑みにしているとあらぬところで大恥をかき——と、クラス全員が今更のように思い知ったのではなからうか。

「おれと千堂を張り合おうなんて命知らずなチャレンジャーは津寺くらいなモンだって」  
 なんて、そこで——津寺？

それを問いたいのは山々だったが、もはや、どっぷりと重いため息しか出ない。

「あ………だったら、わざわざご注進に来てくれた人たちにもそう言っとけばよかったかな」  
 「え……？」

「千堂と高槻が、すっごく親密な話をしてたって。人目避けて、わざわざ人気がないところでなんて、やっぱり、あれは告ってんのかなあ………って」

「へえ………。いたんだ？ そんな物好きが」